

韓国近代における〈女性〉 —「新女性」をめぐる—

李 南錦

はじめに

韓国の近代は、帝国日本の植民地経営による歪んだ歴史と共に歩んできた。韓国社会の近代化について問い直そうとする際、このような植民地時代の影響を考えずにはいられないし、根強い儒教思想のもとに築かれてきた抑圧的な女性ジェンダーの問題に関しても再考せざるを得ない。

特に、韓国社会における近代化と女性ジェンダーの問題に関して、金恩賞氏は、韓国の植民地時代を、「近代化プロジェクトにおいて〈暗黒時代〉として再現された時代」と定義し、「過去の傷ついた民族に向けての憐憫と祖国に対する強い念願」は、1945年の解放以降、独自の韓国近代化の過程においても影響を及ぼしたと論じながら、「我々の近代化には志向としての西欧化と軍事主義、守るべき伝統、民族主義、家父長的な性別体系のような様々な理念体系が混在している」と述べた¹。これは、抑圧的な植民地近代という時期の影響が、それ以降の韓国社会においても続いていることを示唆しながら、特に、韓国の近代化と社会的に劣性的なジェンダーの位置に置かれていた女性との関連性を問題化している。

本発表では、特に、韓国社会において女性問題が活発に議論されるようになるきっかけを提供した「新女性」たちの出現に着目し、近代における女性ジェンダーの問題と時代像との関係性を、文学作品を通して再考する。そのために、近代の男性作家と女性作家の作品に描かれた新女性表象を時代言説と共に比較分析する一方、延いては、現在に至るまでの韓国の近代化過程のなかで、新女性現象が残した影響に関しても考察を加える。

1. 韓国社会における近代化と女性ジェンダーの問題

ケネス・ウェルズ氏は、「韓国社会はジェンダーを解釈の軸として使えるような事例を歴史的に見せてくれる」とし、韓国は「非常に意識的にジェンダー原理に基づいて組織されている」社会であるため、「ジェンダーが社会的に構成されたものではなく、韓国社会がジェンダー原理によって構成されたと言ってもよい」と述べ、これは「19世紀後半～20世紀後半の社会改革に対する熱望が強烈に燃え上がる時に、ジェンダー、特に女性の役割が核心的なイシューになったという事実で確認できる。」と論じた²。

ここでの「イシューになった女性役割」とは、1919年の3・1民族独立運動以降、本格的に登場し

た「新女性」という用語を浮上させる。植民地時代は、新女性たちによって主導された多様な女性解放の理念と儒教原理による良妻賢母思想が混在していた時代である。しかし、金元周や羅蕙錫たちによって主導された「新女性」たちの活動は、民族の現実と常に絡み合っ、女性個人の問題から段々と離れるようになった。それに対してケベス・ウェルズ氏は次のように述べている。

「羅蕙錫や金元周たちによる女性解放の論理が1920年度に初めて発表されたにも関わらず、その後に使われた述語は、主に男性民族主義者たちによって彼らの目的に合うように規定された。…（中略）… 女性解放を民族主義的・社会主義的な解放と関連づけたのは、おそらく女性たちが自分の運動を認めてもらうために選んだ主な戦略だったのであろう。…（中略）… 当時の一番無難な考え方は一女性問題の解決は（全体）の解決によるという意味から一女性問題は（全体）の問題と繋がっているということであった。しかし、このような関連付けを収容しながら女性活動家たちは、おそらく自分も知らないうちに、女性が凡ての個人的・社会的な関係において、そして究極的には民族主義や社会主義の核心的な優先順位との政治的な関係において、自己決定権を持つためのジェンダーの新しい配置という彼女らの最初目標を段々と放棄し、女性解放理論は隠蔽され、たかだか女中の役割をただけである。南韓国の女性団体が男性中心的な観点の民族文化と歴史に対する効果的な抵抗ができるようになったのは、僅か最近になってからである。」³

このような分析を通して分かるように、近代韓国における女性問題は、常に国家と社会の状況と切り離すことができないものであった。1920年代から出始めた「新女性」たちの言説は、以前の儒教的な家父長制に縛られていた矛盾的なジェンダー構図を改革し、女性個人の問題を顕わにしようとした女性解放の言説であったにも関わらず、植民地という時代状況によって様々な批評を浴びるようになったのである。新女性たちは男性と同様に近代的な新式教育を受け、留学もしたのにも関わらず、浅はかな存在としてモダンガールという揶揄的な呼び名で呼ばれるようになっていく。そのような矛盾的な社会の構図は植民地から解放された後の韓国社会にも影響を残している。ここに、韓国社会の近代における女性、特に「新女性」との関係問い直す意義を見出すことができると思う。

では、近代韓国の「新女性」とはどのような女性だったのか。韓国の近代における「新女性」は、まず教育を受けた女性を指す言葉であった。しかし、この「教育」とは、女性にとっては「新しい文化と文物に対する知識を身につけるとともに、人間らしく生きていこうとする意欲を高める一つ的手段」であったが、男性知識人にとっては、「女性を教化し、変化させて、民族と社会のために容易に用いられる人材を創り出す」ことを意味していた⁴。植民地近代当時の代表的な男性作家である李光洙の作品で、韓国最初の近代小説と呼ばれる『無情』は、自由恋愛主義への肯定など、韓国近代文学史上において重要な評価を受けている作品である。その『無情』にも、女性の意識が近代化することと教育との関係が強調されている。

キム・ミジ氏は、『無情』が空前のヒットを記録したことは、『無情』(朝鮮時代の芸妓・娼妓のこと←稿者注)と「女学生」という当時の一番人気ある人物像を形象化し、その両存在の衝突と競争の様子を描き出した点による」と述べ、「新しい時代に浮上してくる女性像は〈学ぶ女性〉、つまり〈女学生〉である」と述べている⁵。つまり、近代において社会言説に大きな影響を及ぼした小説の分析は、新女性現象を考察する一つの手掛かりになることができる。

2. 李光洙(イ・グァンス)の『無情(ムジョン)』における女性と教育

『無情』⁶は、韓国最初の近代長編小説として位置づけられている作品である。キム・ユンシク氏は『無情』を「文学史的な意味合いから記念碑的であり、作家春園(李光洙の雅号←稿者注)の全生涯の投影であるため春園のすべての文字行為の中でも記念碑的である」と評価し⁷、作家の自伝的な要素と作家のイデオロギーが投影されている作品であることを示唆している。『無情』の視点に関する議論の殆どは、その「全知的作家視点(omniscient author narration)」を取り上げているように⁸、一般的に語り手の意識が李光洙自身の意識と同様のものとして扱われてきた。これは李光洙の他の作品にもよく見られる傾向で、その傾向には、文章を書き始めた理由として〈教育と啓蒙〉を取り上げている李光洙自身の理念⁹が関わっていると思われる。

このような植民地時代の知識人男性作家によって書かれた『無情』には、独立運動をする途中で濡れ衣を着て投獄された父を助けようとし、やむを得ず妓生になった英彩(ヨンチェ)と、近代教育機関であった女学校卒でアメリカ留学を計画している善馨(ソンヒョン)、日本留学中の女学生であるビョンウクという3人の女性が登場する。それから、男性主人公である亨植(ヒョンシク)は、長い間お世話になっていた恩師の娘である英彩と、幼いごろから結婚する約束をしていた。しかし彼女と会えなかった7年間のうちに、

彼女を裏切り、家庭教師として英語を教えていた教え子の善馨と結婚する約束をして、アメリカ留学を決意する。父を失い、亨植への希望さえなくなった英彩は、妓生になった身を恨みながら自殺を図ろうと汽車に乗るが、その汽車で日本留学中の女学生で、休みの間に実家に戻っているところであったビョンウクと出会い、新しく生れ変わるために日本留学の道に立つ。亨植と善馨、英彩とビョンウクが留学に向かう汽車のなかで、4人は偶然出会うことになり、各自が国のためのよい人材になることを決意する内容である。

善馨とのアメリカ留学を決心した亨植と友人の友善(ウソン)との会話を通して、近代教育に関する作家の意識を窺うことができる。亨植は、「今朝鮮に一番重要なものは教育である」と言い、新教育を研究するためにアメリカに行こうとする。友達の友善の「どういう教育か」という質問に対して彼は、「もちろん教育といえば小学教育と中学教育を意味する。今の朝鮮は正にペスタロッチを待っている時だと思う。朝鮮の人々を全く新しい朝鮮の人に造り上げようとするなら教育以外に何でできるだろう。どの時代どの国だってそうしないはずがないだろうが、至急古い朝鮮を捨てて新文明化した新朝鮮を造るべき朝鮮では、万人が皆教育のために努めなきゃならない。君も文筆に従事しているので、どうか教育熱を鼓吹してくれ。今の教育は本当にみすばらしいからさ……。」(85章)と返答する。

それに、小説の最後で同じ汽車で出会った3人の「乙女」たちは、「そうです。教育をもって、実行としてあの人たちを教えなきゃ、導かなきゃ。でも、それを誰がやりますか?」と聞く亨植の質問に対し、「私たちがやります!」(124章)と決意するように答える。この乙女たちは、朝鮮の芸者または遊女にあたる〈妓生〉と、女学校卒の〈新女生〉、そして日本留学中である〈女学生〉の3人で、皆が近代の新教育を身につけるために留学の道を選んだのである。

このように『無情』には、朝鮮における教育の重要性を主張する言説が強く、しかもその教育とは、民族改良の手段として用いられるべきものになっている。

『それなら、もう卒業なさったんですか。どの学校に通っていらっやっったんですか……。淑明ですか、進明ですか。』

『どちらにも通っておりません。』

この答えにその婦人は、口に餅をくわえたまま嘔もうともせず、茫然と座って英彩を見る。だったら、この女は何だろう、と思った。人の妾だとも思った。学校に通っていなかったという言葉に、多少は軽蔑する気持ちも起こるが、一方ではこれはどんな女なのか調べたい好奇心も出てくる。(88章)

これは、妓生である英彩と女学生であるビョンウクが出会う場面であるが、ビョンウクは最初、英彩を女

学生だと思って学校を尋ねるが、学生ではないという返答に対し、軽蔑と驚きを感じるようになる。これを通して、外観では女学生と区別できない妓生の身なりを推測することができる一方、教育を受けた女性と妓生を対比する言説を通して、女学生と妓生を分類しながらも、一方では両方とも男性の性的な対象にし、揶揄・批判していた、当時の矛盾的なまなざしも見えてくる。そこには、女性を社会的に都合よく分類・統合する男性中心主義的な政治学が働いているともいえるのであろう。

90章には、女学生のピョンウクが妓生の英彩に新女性の思想を伝える場面が描かれている。ピョンウクは、儒教の旧思想が多くの人を殺し、不幸にさせたと言い、「このような古い思想の束縛を切って下さい」、「自分のために生きる人になりなさい」と英彩を説得する。そして、「女も人間ですよ。人間である以上、人間としての職分が多いはずですよ」と言い、女は、「過去の朝鮮と、現代の朝鮮同胞と、未来の子孫のために生まれてきた」、「だから両親や愛する李さんに対する義務以外にも、先祖、同胞、子孫に対する義務がある」として、結局英彩を連れて日本留学に発つ。『無情』でも、羅蕙錫など、当時の「新女性」たちが主張した「人間になりたい」というキャッチフレーズが使われているが、そこには、個人を犠牲にした国家と民族のための人間になることを呼びかける思想が隠されている。

しかも、『無情』の最後の章は、「毎年各専門学校では、丈夫な働き手が溢れ出て、毎年普通学校の門には、可愛くて元気旺盛なお坊ちやま、お嬢様たちが入っていく！いかに嬉しいことでしょう。暗い世が一生暗いはずではないし、無情の世が一生無情であるはずがない。私たちは私たちの力で明るくし、友情にし、楽しくし、豊かにし、たくましくするべきである。喜びの笑いと万歳の叫びをもって、去る世を弔う〈無情〉を終わらせよう。」(126章)と、個人の感情を捨てて、国と民族のために喜びをもって、教育の道に進もうという啓蒙的な言説で終わっている。

『無情』において女性は、〈国家と民族のために〉という男性知識人たちと同じ目的に向かうとき、〈妓生、女学生、新女性、旧女性〉の区別のカテゴリが無化されるような言説の上に立っている。しかし、そのような目的が考えられない現実のなかで女性は、いつも妓生のようなセクシュアリティの対象になるか、良妻賢母教育の下にいる女学生になるか、という両側の道に立っていたのである。李光洙は当時最高の知識人で、男性フェミニストとしても知られるほどであったが、彼の作品『無情』の新女性言説には、近代の男性中心的なイデオロギーのなかで、いつも支配権力によって定義されるしかなかった女性の現実が解決できないまま潜んでいる。

3. 羅蕙錫（ナ・ヘソク）の「瓊姫（キョンヒ）」に描かれた女性教育

次は、植民地時代当時の代表的な新女性で、また画家でも作家でもあった羅蕙錫の短編小説「瓊姫」を見てみよう。日本留学中の女学生である瓊姫が、休みを迎えて家に戻っている間の一話を書いた作品で、旧女性であるお母さんとの対話や、近代教育から学んだ方法で家事をする瓊姫の姿、そして旧思想を持つ両親の結婚観と対立する内容などが描かれている。1918年3月、韓国最初の女性雑誌『女子界』第2号に発表された小説「瓊姫」は、作家の羅蕙錫を韓国近代文学史に一人の女性作家として立たせたと評されている。

「瓊姫」は羅蕙錫の自伝的な小説で、「新女性」として生きていた自分の姿をよく表している作品であり、「新女性」物語であるという評価¹⁰や、母性と関連づけた研究もある¹¹。しかし、日本留学中の女学生「瓊姫」が主人公になって、女性教育の必要性を主張する内容などを通して、男性作家によって書かれた『無情』における女性教育問題とは違う観点から女性の教育問題を考えてみるができるテキストである。

「金夫人はなるほど分かった。たくさん勉強するほど人に敬われ、給料もいっぱいもらうことが分かった。あんなに格好付けた背広を着て、金時計の紐を垂らしかけている大人しい監督がわざわざ小さい女を訪ねてきて、何回もお辞儀をすることや、同じく一カ月30日間を、胸を痛めながら必死になって働く普通学校教師でも、多くて620両（貨幣の単位←稿者注）、普通は500両なのに、『のんびり遊びながら1年に屏風二つだけでも上手く刺繍をしてもらえれば、給料を必ず40ウォンずつは差し上げます』という言葉によって、金夫人は、さすが勉強というのは必ずやるべきことで、やるなら少しでも日本にまで行かせてさせるべきだということが分かった。そしてある日の夜、瓊姫が、『たくさん勉強をしなきゃ。そうしてこそ人に敬われるばかりじゃなく、私も人間らしく生きていけそうです』と言っていたのは、たぶんこのようなことのためだったろうと思った。」(1章)¹²

母の金夫人は、女性が刺繍などの教育を受けることによって家庭経済にも役立つことに悟り、女性も学ばなければならないと言っていた瓊姫の考え方を理解したと勘違いしている。しかし、家に訪ねてきた近所のおばさんたちの会話を聞いた瓊姫は、彼女たちに向けて次のような話しをしてあげたいと思っている。

「食べたり着たりするだけでは人間じゃない、学んで（世の理を）知ってこそ人間ですよ。貴方の家のようにご主人と息子さんに妾が四人もいるのも、学ばなかったせいであり、それによって心

を悩ませている貴方にも（世の理を）知らなかった罪があります。ですから、女が嫁いでから夫が妾を置かないようにする方法も教えなきゃならないし、妻のいる男に妾を作らせないようにすることも教えなければなりません。」(1章)

「良妻賢母」の修行にもなり、金銭的な収益が得られることで、女性の教育に同感している母親と比べ、女学生の瓊姫が目指すことは、「人間になること」であった。「瓊姫も人間である。その次には女である。だったら、女というよりまず人間である。また朝鮮社会の女よりまず全宇宙全人類の女性である。李鐵原、金夫人の娘よりまず神様の娘である。とにかく確かな人間の姿である。その姿はしばらく被れている皮だけではなく内臓の構造も確かに禽獣ではなく人間である。そう、人間である。」(4章)と、瓊姫は「朝鮮社会の女」「誰だれの女」より、「自分自身としての人間、また女性」になることを望んでいる。彼女は自らの意志と人格が尊重される人間になることを願っていたからこそ「学ばなければならない」と思ったのである。

羅蕙錫のような近代の女性作家の作品に見られる女性教育に関する言説は、新女性現象と結びついて韓国近代以降の女性問題にまで問いかけをしている。それを見るため、近代から現代まで生きてきた女性作家の作品に、新女性はどのように描かれているのかを考察してみよう。

4. 朴婉緒(パク・ワンソ)の「母の杭(엄마의 말뚝) -1」を通してみる〈新女性造り〉の問題

1980年に発表された朴婉緒の小説「母の杭-1」¹³は、故郷の田舎で夫を亡くした後、伝統的な生活を後にし、幼い息子と娘を連れて京城(今のソウル←稿者注)に上京した母親が、苦勞の末、ついに一軒の家を持つことになるまでの話である。特に、語り手になっている娘の幼い時代の回想を通して、「植民地を生きていくお母さんの娘への、無意識的な新女性造りの過程」が描かれている。植民地時代の後期が背景になっているこの作品は、1931年生まれである作家の個人的な体験が元になっていると言われている。

次は、二人の子供を連れて京城に向かう途中での母と娘の会話である。

「母はまた私の耳元にこそこそと、自分がソウルに行つてこれから成るべき新女性について話してくれたりもした。

『新女性って何?』

『新女性は、ソウルに住んでいるだけで成るものじゃなく、たくさん勉強しなくちゃいけないものだよ。新女性になったら髪の毛この母のように簪をする代わり、ひさし髪にしなきゃならないし、服も足を出す黒いトンチマ(スカート)を着て、ハイヒ

ールを履いて、ハンドバックを持って通うのよ。』
…(中略)…

『新女性は何をする者?』…(中略)…お母さんはすぐには答えなかった。お母さんの顔は非常に困っているようであった。…(中略)…お母さんはどもりながら言った。

『新女性とは、たくさん勉強をしてこの世の理について知らないことがなく、やりたいと思ったことは何でも思うままにできる女性のことだよ。』

(p.24~p.25)

『勉強に頑張つて、針仕事などは一切やろうともしないで。手先が器用だと手先で食べていくし、歌が上手だと歌で食べていく。顔をきれいにすると顔で食べていくし、無才能だったら無才能で食べていくはず。ママは無才能も嫌だけど、手先や歌や顔で食べていくのも嫌。貴方はたくさん勉強して新女性にならなきゃいけないのよ。分かった?』

母は、新女性は何をして食べていく者かについては言ってくれなかった。」(p.36)

母親は、娘を新女性にさせるため、京城まで連れていく。しかし、「新女性って何?」という娘の質問に対しては確かな答えができない。ただ、植民地の田舎で夫の家族と一緒に住むような伝統的な生活をしてきた母にとって、都市の新女性は、漠然とした憧れの存在になっていたのである。

都市(京城)に到着した娘が最初に感じたのは、「私はジゲクン(荷物を背負って運ぶ商売をする人←稿者注)の険しい顔に、軽蔑がかすめていくのを見逃さなかった。都市の集団のなかで母は小さくてみすぼらしく見えた。」(p.26)のように、都市の差別的なまなざしであった。

しかし母親は、「ここはソウルでも門外¹⁴だわ。ソウルといえるほどでもない所だけけど…。お兄さんが成功するまででここでも苦勞を辛抱すれば、私たちがこれ見よがしに門内に入って住めるだろうからさ、分かった?」(p.28)と娘に言い聞かせながら、都市を二分するヒエラルキーのなかでも、(門内入城)への希望を持って日々の苦勞を辛抱する。それに、娘は自分のように無視されない存在にさせたくて、新女性になれるように教育させる。

そのような京城での生活のうちに、娘の目には、「門内」にいるはずの新女性の格好をした女性が「門外」にもたくさん見えていた。結局、娘は、住所を偽造してまで「門内」の学校に入学するが、新女性の格好をした先生に一回も手をとってもらったことのない学生として、更に疎外されている。母親が主張した「門内」にだけ入ったら何でもできそうだった考えは、「門内」での更なる違和感によって、娘には、「新」女性の「新」の意味に対する疑問を抱かせる。

しかも、「母は自分では届かなかった理想郷と差当

り置かれている現実との葛藤を和らげるために、自分も知らないうちに子を利用して、実際に子が経験する葛藤については無知なほうであった。」(p.49)のように、母の欲望を代わりに満たすべき存在になっていた娘の葛藤は、大人になるまで彼女の内面に影響を及ぼすことになる。

「母が不慣れな、針先も入らないほどのやせ地に、じたばたして杭を打ち込むまでして、どうしても私になってほしいとあんなに切実に望んだ新女性より、今の私はあんまりにもおしゃれになっているのではないか。しかし母が新女性にできることだと思っていたことから、どんなに途方もなく離れているのか。…(中略)…母が立てた新女性というものの基準になっていた、あんまりにも時代外れの外観と途轍もなく高い理想との葛藤、上品な根拠と俗っぽい虚栄との矛盾、永遠な門外意識、それは今も私の意識内容であった。そういえば私の意識は未だに杭を持っていたのである。…(中略)…私はまだ自分が忘れていない(新女性)という言葉、まさに復元した城壁のように、古いものでもなく、新しいものにもなれず、滑稽で無意味な意地っ張りであると感じた。私はこれから二度とそれを復旧しないつもりである。それは、去る月日もやはり否定されてはいけなさそうな気がしたから。」

(p.60~61)

母の〈門内入城〉は結局、息子を通して叶えられるし、娘の新女性造りによって母が味わい楽しむことはあまりなかった。植民地という限界状況において娘を教育させようとした母の意志は、娘が成長するまで植民地性という杭が除去されずに残っている傷痕になったのである。大人になった娘の姿は、近代の国家と民族のイデオロギーによって主体的でいられず揺れ動かされるしかなかった朝鮮女性たちの悲哀を内在している。

チェ・ギョンヒ氏はこの作品に対して、「植民地的な空間におけるソウルの四大門内の文化は、近代性の中心であるばかりでなく、植民地的近代性の中心でもある。」と述べながら、「植民地期の最後の数年間『新女性』の方向を決める最後の仲介者は、『門外』にいる『母』でもなく、『門内』にいる新しい母像の先生でもない、日本の帝国主義政府」であり、「この話しは、韓国のお母さんたちが植民統治下で体験した相対的な自律性を描きながらも、近代性のための『母』の努力が、植民地権力によってどのように制限されるしかなかったのかを説得力をもって見せてくれる」とした。そして「『新女性』という理想に対する『私』と『母』の関係は、多くの後輩たちが経験した、より大きな規模の近代化過程を象徴し、『母』の『新女性』理想は、植民地的な脈絡からはつかまらないし、つかむこともできないものである。」と分析する¹⁵。

近代韓国における抑圧的な植民地権力の影響は、当時の劣性的なジェンダーの位置に置かれていた女性たちを更に抑圧するものであった。「母の杭-1」における〈娘の新女性造り〉の話しを通して、女性の主体性に関する問いかけは、一個人の家族史に留まらず、韓国人の民族史と結ばれていることと、そのような矛盾的な近代性が現代に至るまで韓国の女性たちのなかに内在していることを見ることが出来る。そして、韓国の女性ジェンダーの問題を解釈する際、植民地近代を生きていた新女性たちの在り方を問い直すべきであることを更に示唆していると思う。

おわりに

：近代韓国の「新女性」に内在した限界と矛盾

パク・ソンミ氏は、「朝鮮の人の日本留学は、朝鮮社会が植民地的な近代化の過程を経るうちに「中心」(内地、メトロポリス)と「周辺」(外地)という帝國的な文化構図が創り出した社会文化的・歴史的な現象」と見て、女性の日本留学を〈植民地的な文化交流〉として分析している¹⁶。これは、教育を受けた新女性たちが植民地内において、日本帝国に対する抵抗と憧れの二つの姿で葛藤するしかなかったことを認識させる。それから、キム・スジン氏は、「京城の近代性は植民地的な矛盾と多様性を上演する中心地」だと述べ、「朝鮮で1920-30年代に登場した新女性現象は、京城中心の近代的な変動とその植民地的な多様性を背景にして存在した」と述べている¹⁷。

つまり、植民地朝鮮における新女性現象は〈近代性、植民地主義、民族主義〉という様々な概念と絡み合っていて、女性個人の問題にまで発展することが非常に難しかったのである。新女性の出現は、女性が自分を探そうとする努力として始まったが、結局、新女性たちは、植民地主義的なイデオロギーによって左右されるようになる矛盾を抱えたまま、自国の一般市民たちからは揶揄・批判され、民族主義者たちには国家のために利用され、帝国日本には従軍慰安婦として売られるしかなかった近代韓国の女性たちの悲哀を、そのまま内在するしかなかったといえよう。

金恩實氏は、韓国の「女性たちは、自分が創り出す多様な社会的アイデンティティにも関わらず、脱歴史的、生物学的、本質的な存在としての女性、という同一性に縛られている。すべての女性を同一にカテゴリ化しようとするこのような言説は、一番強力に、女性たちを規定し、統制し、更に女性たち自らこのような文化的権力を内在化するようにさせる。」と述べた¹⁸。

帝国日本によって、家父長的な文化と民族主義的な男性中心の自国の現実、いつも周辺からも中心からも排除されるしかない、不安で曖昧な位置に置かれた女性を創り出した。植民地という限界状況下の「新女性」たちは、そのような権力構図の真ん中で格闘していた存在だったのである。新女性たちが獲得しようとした真の近代的な意識と人間としての主体性の確保

に対する念願が、現在を生きる韓国女性たちの格闘と発展にも繋がることを望む。

【註】

- 1 金恩實 (キム・ウンシル)、『韓国近代化プロジェクトの文化論理と性別政治学』『東アジアの近代性と性の政治学』, *푸른사상* (ブルンササン、韓国)、2002年、p.192~195
- 2 ケネス・ウェルズ (Kenneth M. Wells)、『合法性の代価：女性と権友會 (グスフェ) 運動、1927~1931』、신기욱 (シン・ギウク) / 마이클·로빈슨編 / 도·미온 페訳『韓国の植民地近代性』, 삼인 (サミン、韓国)、2006年、p.282
- 3 ケネス・ウェルズ (Kenneth M. Wells)、前掲書、p.317~318
- 4 김미지 (キム・ミジ)、『誰がハイカラ女性と共に暮らすか — 女学生と恋愛』, *살림* (サルリム、韓国)、2005年、p.89
- 5 김미지 (キム・ミジ)、前掲書、p.89
- 6 『無情』は、李光洙が早稲田大学に留学していた 1917 (大正 6) 年、朝鮮の『毎日申報』に 1 月 1 日から 6 月 14 日まで連載された長編小説。
以下、テキスト引用は『李光洙全集』(三中堂[韓国、1974年])により、引用の最後に章を示しておく。
- 7 김윤식 (キム・ユンシク)、『李光洙と彼の時代 1』, 2001年、솔 (ソル) 出版社[韓国]、p.566~570
- 8 『無情』の視点と叙述様式について丘仁煥氏は、「主人公の感情を分析し、心理的な変化を説明して性格の内向性 (inwardness of character) を知らせてくれる。李光洙は全知全能な神のような位置から秩序が崩壊され、新しい近代意識による開化に眼が覚めてゆく現実の中で悩みながら生きていく人間たちの生活を叙述している」と述べている。(丘仁煥、『李光洙小説研究』、三英社[韓国、1996年、p.29])
- 9 李光洙は随筆「多難な半生の途程」で、「文章と教育で同胞を悟らせようということであった」と、文章を書き始めた理由を語っている。(『李光洙全集』第 8 巻、p.452)
- 10 このような先行研究として、宋明姫 (ソン・ミョンヒ) 「李光洙の『開拓者』と『瓊姫』に対する比較研究」(『比較文学』第 20 集、1995 年、韓国)、정순진 (ジョン・スンジン) 「晶月羅蕙錫の初期短編小説考」(『韓国文学と女性主義批評』(国学資料院、1993 年、韓国)、노영희 (ノ・ヨンヒ) 「羅蕙錫、その理想的婦人の夢—東京留学体験と日本の新しい女たちとの出会いを中心に」(韓林大学校韓林科学院日本学研究所『韓林日本学研究所』2、1997 年、韓国) などがある。
- 11 「瓊姫」と〈母性〉との関係に関しては、拙稿、「植民地朝鮮の「新女性」と母性イデオロギーへの闘い—羅蕙錫の小説「瓊姫」と彼女の言説分析を通して—」(『ジェンダー研究』第 9 号、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、2006 年 3 月、p.39~57) で、より詳しく論じている。
- 12 以下、「瓊姫」のテキスト引用は、이상경 (イ・サンギョン) 編『羅蕙錫全集』(태학사[テハク社、韓国、2002年])により、引用の最後に章を示しておく。
- 13 「母の杭 (엄마의 말뚝)」は全 3 編の連作短編小説。「母の杭-1」は 1980 年『文学思想』9 月号に、「母の杭-2」は 1981 年の同誌 8 月号に発表された。朴婉緒は 1981 年、「母の杭-2」で李箱文学賞を受賞。1982 年、小説集として完結した『母の杭』がイルウォルソガク (일월서각、韓国) から出版される。「母の杭-2」は、韓国戦争と息子の死を描き、全体作品の核心として言われているし、「母の杭-3」は、お母さんの死までの話である。作品の全編が連作ではあるが、各々の短編小説は独立性と完結性を持っている。本稿では、特に、植民地時代が背景になっている「母の杭-1」を取り上げることにする。
以下、テキスト引用は、『朴婉緒小説集 7 母の杭』(世界社[セゲサ、韓国、2008 年])により、引用の最後にページ数を示しておく。
- 14 「門内」と「門外」：京城の中心部を囲んでいた 4 つの城門 (東大門、西大門、南大門、北大門) の内と外の地域を指す言葉。門内が中心部で、門外には貧しい村が多かった。(←稿者注)
- 15 최경희 (チェ・ギョンヒ)、『韓国の植民地近代性』、前掲書、p.344~354
- 16 박선미 (パク・ソンミ)、『近代女性、帝国を経て朝鮮へと回遊する』, *창비* (チャンビ、韓国)、2007 年、p.10~16
- 17 김수진 (キム・スジン)、「1930 年京城の女学生と〈職業婦人〉を通してみた新女性の可視性と周辺性」、권재욱 (コン・ゼウク) / 정근식 (ジョン・グンシク) 『植民地の日常、支配と亀裂』、文化科学社[韓国]、2006 年、p. 493
- 18 金恩實 (キム・ウンシル)、前掲書、p.209